



世界は
毎



あの人が憎い。

あの人の顔を苦痛に歪めたい。

あの人を苦しませて幸せを奪ってやりたい。

大切な人はいますか？

そう………じゃあ。

その人を壊してもいいですか？

いや、その人を壊します。

これは確定事項です。

残念でした。

第一回

腹部に違和感があった。

触って確かめようとする、今度は胸に違和感。

熱いものがこみ上げて来て、吐き出しそうになる。鉄の味が口の中を充満してついにそれを吐きだした。唾液交じりの真っ赤な血は、思ったより吐き出せなかった。

俺の姿を見つめる彼女の右手には、血に染まる鉄の塊。その包丁からは、こびりついた俺の血が滴り落ちている。

「育先輩？」

声を出して彼女を呼んだ。すると彼女は泣きながら「陽が悪い」と一言。俺が何をしたのかわからない。育先輩を傷つけるようなことをしたのだろうか？ 全く身に覚えがない。

視界が回る。育先輩の姿が見えなくなり、俺は地に伏した。

「ごめん陽。大好き」

俺も好きです、と口にしようと思ったけれど、もう声は出そうになかった。

だけど、まだ思考はできそうだった。

その残された力で考える。

育先輩は二年前に死んだ。じゃあ、今の出来事は夢なのではないか？

その答えを出せずに俺は目を閉じ、力尽きた。

第二回 序

不快な感覚にさいなまれ目を開ける。おもらしでもしたのかと思い、焦って起きあがった。股間付近を触って確かめたが、おもらしではなかった。どうも不快な感覚は別なものらしい。

腹部と胸部に若干の痛みを感じて、その部位に手を当てる。特に何もないようだが、さっきまで見ていた夢の内容が鮮明に浮かぶ。

二年前に病気で亡くなった一つ年上の恋人。俺は育先輩と呼んでいた。その彼女に包丁で刺され、殺される夢を見たんだ。

「最悪だ」

呟いて、どうしてあんな夢を見たのか考える。何か後ろめたいことがあるのか考えてみるが思い浮かばず、首を傾げた。

「おはよう」

ベッドの脇から声がした。ビクッと驚き、そちらを見てさらに驚く。

「い、育先輩？」

「？ どうしたの？」

「いや、どうしたのって………なんでここに？」

「昨日遊ぶ約束、した」

「え、ああ、そうだっけ？」

「した」

「………そうでしたね」

どうして育先輩がここにいる。育先輩は死んだ。俺はそれを知っている。二年前、重い病気で入院していた彼女の死に顔をきちんと確認した。あのつらい記憶は本物だ。立ち直るのにはかなりの時間がかかったのも覚えている。

ならばこれは夢だ。まだ俺は目覚めていない。それしか考えられない。

とにかく、夢でも育先輩が目の前にいるんだ。それが嬉しい。こんな機会滅多にないことだし、せっかくなんだからこの幸せな夢を堪能しよう。

「その前に、育先輩。悪いんですけどシャワー浴びてきていいですか？ 変な夢の所為で汗がいちゃって」

「変な夢？」

「えっと、育先輩に殺される夢をみました」

「そんなことしない」

あははと苦笑いを浮かべる俺に対して、育先輩は少し不機嫌に頬を膨らませた。その姿が可愛くて、苦笑いが微笑みに変わる。

「そんなことしない」

もう一度同じことを言った育先輩は、俺に顔を近づける。

「近いです」

「しないから」

唇が重なった。あまりにいきなり過ぎて、一瞬何をされたかわからなかった。

「……………証拠」

キスが俺を殺さないという証拠らしい。

それより、夢なのに妙にリアルじゃないか？ 唇の柔らかさや温もり、近くで感じた育先輩のにおい、全てが本物のようだった。

「こんな幸せってあるか？」 がついつい呟いてしまった。こんないい夢を見られるなら、俺は一生目覚めなくてもいいとさえ思える。いや、もうこのまま目覚めなくていい。育先輩がいればそれでいい。

「私も幸せ」

二人でクスクスと笑いあった。

第二回 終

シャワーを浴びて部屋に戻ると、育先輩は俺の布団にうつ伏せで寝ていた。パタパタとご機嫌に足を動かしているのだから、眠ってはいないのだろう。何をしているんだ？ と思いつつ、タオルで濡れた頭を荒い手つきで拭いた。

「陽、枕もらっていい？」

「……………は？」

「いい？」

「いや、育先輩枕持ってるでしょ？」

「でも……………陽のにおいしない」

俺の布団にいたのはそういうことか。俺のにおいを嗅いでご機嫌だった、つまりそういうことだ。すっかり忘れていた。育先輩はにおいフェチだった。

「いいですけど……………においなんてすぐ消えますよ？」

「その時は交換しにくる」

「交換って……………」

ということは、今度返ってくるときは、俺のくさいにおいは消え、育先輩の香しいにおいがするわけだ。こ、これは……………

「その申し出、喜んでお受けしましょう！」

次に返ってくるときが楽しみだ。

「ところで、今日はどうします？」

「子作りする」

「生憎、避妊具を持ち合わせておりません」

「そんなもの必要ない」

「いやいや、十二分にあるから。じゃあ、今日は外でデートしませんか？」

「ん、それでいい」

育先輩の本気交じりの冗談を軽くあしらい、外出の予定をたてる。

「時々思いますけど、育先輩痴女みたいです」

「……………照れる」

「褒めてないから。だいたい……………」

「陽好きでしょ？ 痴女。これとか」とどこから冊子を取り出して、それを指差す。その冊子には『痴女の痴態』と大きく書かれていた。「物言わぬ証拠」

「ちょっ！ それはっ！」

「まだまだある」

「やめて！ もうわかったから！ それ以上俺の痴態を曝さないで！」

無表情でどンドン別のエロ雑誌を取り出す育先輩。その無表情からは、悪意しか感じない。

「陽」

「なんですか？」涙ながらに声を出す。

「どうして全部黒髪ロング？」

「そ、それはその……」

彼女をおかずにするのは申し訳ないので、代用していたなんて言えない。口が裂けても言えない。育先輩も痛いところを突く。本当はわかっているんじゃないか？

「むう、どうして？ 私には手を出さないのに」

聞こえない聞こえない、何も聞こえない。ドライヤーの轟音で何も聞こえない。

「聞いている？」

聞いてません。今髪を乾かしている最中です。

「……避妊具買わなきゃ」

何か恐ろしいことを呟いている気がしたが、今度は本当に聞こえなかった。

外に出ると、まるで真夏のように暑かった。太陽の働きは雲一つ寄り付かせないほど懸命で、それを真っ向から常時浴びているアスファルトの道路は、ジリジリと熱気を放っている。

「まだ初夏なのにこの暑さ……育先輩平気ですか？」

「平気。日焼け止めも塗った」

「今日のはじめから外でデートするつもりでしたか」

「ん」

やはり子作りは俺をからかうための方便だったんだ。だから、俺もそういう行為をすることを躊躇うことになる。どこまで本気なのか……もし俺がそれに了解したらどうなるのだろうか？

「どこいく？」

頭を捻って子作りについて考えていると、育先輩が俺の腕にしがみつきながら訊いてきた。正直暑いからあまりくっつかないでほしい。けど、嬉しいから言えない。

「水族館はどうです？ あそこは涼しいですし」

「決まり」

今日は水族館デートに決定。

「そういえば、水族館の近くにあった遊園地潰れちゃいましたね」

「何のこと？」

「いや、あのぼろい遊園地ですよ。この前経営難で閉園したじゃないですか」

「まだある」

育先輩と話がかみ合わない。あの遊園地が閉園したのは間違いない。あの人を連れて一緒に閉園を名残惜しんだ記憶はつい最近のものだ。

あれ？ 誰と行ったのか思いだせない。誰だけ？ 育先輩のはずはないし……それよりどうして育先輩がここにいるんだ？ 俺なにか忘れていた気がする。

カンカンと機械的になる踏切にさしあたった。二人足を止めて、踏切に足止めされたことに苦笑いを浮かべた。この暑さで同じ位置に立ち止るのはつらいものがある。

「ここの踏切長いから嫌いなんですよね」

「私も」

「俺飲み物買ってきます。すぐそこに自販機あるし」

「ん」

育先輩の了解を得て、俺は自販機に向かうため来た道を数メートル戻る。自販機にたどり着き何を買うか悩む。あまり炭酸は好きじゃないし、喉が渴いているから甘過ぎるのも無難じゃない。とりあえずお金を入れた。

「危ない！」

レモンウォーターに決めてボタンを押した。踏切の方から、男性の野太い声がしたけれど何かあったのだろうか？ 俺はそれを気にせず、取りだし口に手を突っ込み、買った物を取り出した。

踏切の方はギャーギャーと騒がしい。そちらに目をやるとちょうど貨物列車が通っていた。色様々なコンテナが俺の視界を流れて行く。人の叫び声と一緒に、金属がこすれる耳障りな音がある。

「女の子が轢かれたぞ！」

育先輩の姿を探す。

「あれ？」

育先輩がいない。上がりきっていない踏切の中には小さな女の子が目を丸くしている。

「…………育先輩？」

ペットボトルを投げ捨て踏切の方に走る。小さな女の子に集まる人を避けて、俺は線路のレールが長く続くその先を見た。その先に、黒い髪の毛をした女の子が横たわっていた。

「嘘だろ…………？」

血だらけのそれはもうすでに息をしている様子はなかった。

そして俺は意味もなく叫んだのだ。

ここは何もない。

真っ白な空間に私は閉じ込められている。

どこまでも白く、終わりが無い。

あなたはこの世界でたえられますか？

私はそろそろ限界です。

でも一つ楽しいことを見つけました。

あなたの歪んだ顔が見られることです。

大切な人を失いましたね？

一度失ったものを何度も失うつらさはどうですか？

さぞつらいでしょう。

でもまだ許しません。

まだまだあなたには失ってもらいます。

これはまだ始まりに過ぎません。

まずは西野育を失ってもらいます。

可哀想な西野育。

あなたは何度彼女を失うことになるのでしょうか？

うん？ あなたの言い分は訊いてません。

だめです。

あなたの大切なものを壊すと断言しました。

これは確定事項です。

残念でした。

第三回 終

育先輩は首を吊っていた。机の上にはメモ用紙。

私は陽を苦しめる存在だから。

それは許せない。

だから死にます。

さようなら。

大好きです。

目眩がした。意味のわからなさに、その場で嘔吐する。

第四回 終

観覧車が落下した。落下したゴンドラには俺と育先輩が乗っていた。

だけど俺は育先輩を守って死んだ。

おそらく育先輩も助からなかっただろう。

俺の希望は砕かれたに違いない。

目の前をトラックが急ブレーキをかけながら通り過ぎる。

俺はそれが止まるずっと前から「止まれ」と叫んだのに、トラックは通り過ぎた。

赤い液体が飛び散って、アスファルトにまるでアートのような模様を作りだしていた。

だけどそれは、少女からさらに流れ出てくる赤で塗りつぶされていく。

育先輩が轢かれた。

俺は記憶にない『いつか』みたいに叫ぶことしかできなかった。

通り魔の被害にあった。

俺は心臓から飛び出す刃物を見つめる。

育先輩は隣で茫然としていた。

俺が「大丈夫」と伝えると、珍しく育先輩が声を荒げて叫んだ。

心臓が痛い。

育先輩が何か言っているが、俺にはそれを聞きとる手段が残されていなかった。

第七回 終

育先輩が息をひきとった。

病状が悪化して、病院に運ばれる最中に死んでしまった。

いつかの出来事を思い出す。

俺はまた育先輩を失った。

第八回 終

育先輩が死にました。

ひどい頭痛がして目を覚ます。

次に、吐き気がこみ上げて来て、急いで布団から出てトイレに向かった。バタバタと足音をたてながら階段を下りて、一階のトイレに駆け込むと、躊躇いなく胃の内容物を吐きだした。

「大丈夫か？」

後ろから声がした。開けっぱなしのドアの向こうに姉の姿があった。眠そうに顔を擦りながら、こちらを窺っている。

大丈夫と言おうとして、また嘔吐する。今度は胃液しか出なかった。喉が焼けるように痛い。

「大丈夫そうもないな。水用意しておくから終わったら台所に来な」

ゴホッゴホッと喉につかえたものを無理やり出す。

「姉さん待った」

辛うじて声を出せた。

「育先輩は……？」

「は？ 何を言ってるんだおまえは？ 西野育なら二年前に」

「そっか」

「どうしたんだ？」

先ほどまで見ていた夢の内容を思い出す。俺はまた嘔吐する。頭痛がひどい。

育先輩を何度も失った。妙にリアルな夢で、俺は今もまだ夢を見ている気分だ。

「姉さん、これ夢じゃないよな？」

「当たり前だろ。何を言ってるんだ？」

呆れながら姉さんは台所に消えていった。そして俺は、もう出すものが残っていないのに消えない吐き気と、喉の痛み、頭痛とが合わさって、しばらくその場を離れることができなかった。

*

うがいをして、ついでに顔も洗ってから台所に向かった。そこには欠伸をして、眠そうな姉がいて、俺に気付くなり水を差しだした。

それを受け取り、一気に飲み干す。冷たい水が、胃液で傷んだ喉を少し癒してくれた。

「少しは楽になったか？」

「ああ、少し」

「で、何かあったのか？」

姉は心配そうに俺を見つめる。その優しさが嬉しくて、俺は先ほどまで見ていた夢のことを話す。

「安心しろ。今は夢じゃない」

だけど俺はまだ信じ切れなかった。何せ、夢の中でも感覚が存在していたから。

「あえて言うが、二年前に西野育は病気で死んだ。おまえも知ってるだろう？」

声に出さず頷いた。

「もう西野育はいない」

「わかってる」

今の時点で夢と現実を区別できる手段が、育先輩が活着しているか、死んでいるかなんて………
皮肉なものだ。これでは、常に育先輩を失っているように思える。

「真っ白な世界で誰かが言うんだ。『大切なものを壊す。これは確定事項です。残念でした』
って。ただ、その言葉が頭の中に浮かぶだけで、実際に声を聞いているわけじゃないんだ」

それで、俺は何度も育先輩を失った。

「私にできることはなさそうだな。少し寝ろ、と言いたいところだが………無理か」

「正直寝た気がしない。今もかなり眠くて、気を緩めると寝てしまいそうだ」

またあの夢を見るかと思うとゾツとする。真っ赤になった育先輩をまた見ることがつらい。俺が死ぬ感覚を味わうのつらい。

「やはり少し寝ろ。うなされてたらすぐ起こすから」

「でも………」

「いいから。学校始まるまでまだ時間はある。だから寝ろ」

「………わかったよ」

姉の勧めで、リビングのソファに横になる。なぜか姉の膝の上に頭を乗せることになったが、今はどうでもいい。とにかく頭痛と眠気がやばい。

眠りたくないのに、俺は誰かに引っ張られるように眠りに落ちていく。

それがひどく怖かった。

うやめてくれ。俺は真っ黒な世界で叫んだ。

「……で……た」

もう失いたくない。俺は泣きながら懇願した。

「……………した」

これ以上は耐えられない。声がかすれる。

「か……………じ……………です」

誰かの声が頭に埋め込まれる。何を言ってるのか聞きとりづらい。

あたりを見回して声の主を探す。真っ黒で何も見えない。

頭が痛い。吐き気がする。

「壊す」

はっきりと聞こえた。声が近づいているようだった。

もう一度、暗闇の中を見渡す。何もない。けど誰かいる。

「確定事項です」

後ろから声がした。俺はすぐに振り返り、それを確認する。

暗闇の中で、その口元だけが見えた。まるで口元だけ剥ぎとって、宙に浮かせているようだった。

俺はそれに向かって何かを言った。自分でも何を言ったのかわからない。

ただその返答がこうだった。

残念でした。

それは不気味に笑っていた。

頬を叩かれる感触に目を覚ます。

「陽、大丈夫か？」

姉が上から心配そうに顔をのぞいていた。ズキズキと痛む頭を抑えながら「大丈夫」と強がりと言うが、起き上がれそうになかった。

「まだ一分も経ってないぞ」

眠ってから数十秒で変な夢を見て、姉に起こされたようだ。全然眠った気がしないのはその所為か。

声を出すのもつらい。姉のされるがままに膝の上の頭を撫でられる。とにかく眠いが、眠ってしまうとまたアレを見てします。それが、嫌で必死に閉じてしまいそうな瞼を見開く。

「頭痛薬用意するから待ってろ」と姉が俺を起こしてから立ち上がる。ソファに全身を預けて、ため息をしながら姉を待った。

「ほら」水と薬を持ってきた姉からそれを受け取る。のろのろな動作で薬を口に入れ、水で流しこむ。

「今日は学校休むか？」

飲み干したコップを姉に渡すと、俺の額に手を当て、熱があるか確かめながらそう言った。

「いや大丈夫。むしろ学校に無理してでも行きたい。家にいると寝ちゃうから」

「そっか。無理はするな」

それから、学校に行く時間まで姉と会話して暇を潰した。

学校がこんなにもありがたいと思ったのは初めてかもしれない。いつもは騒がしくて、めんどくさいだけのここも、今では眠りを妨げる最適な場所だ。

「どうした？　なんかにやけてないか？」

会話していた友人の田邊 明（タナベ アキラ）は、俺の妙な笑みをそう表現した。

「ってか、よく見たら隈できてるぞ？」

「ちょっと寝不足でさ」

「興奮する夢でも見たのか？　あの会長とあんなことやこんなことをしたとか」

「あの会長？」

心当たりのない言葉に、疑問を投げかける。

「とぼけるなって。おまえ、この前会長とデートしてただろ」

何のことだろうと頭を捻るが、本当にわからなかった。寝不足で頭がきちんと機能していないようだ。その会長が誰なのかさえ思いだせない。

おそらく、俺が所属している生徒会の会長のことなのだろうけど、会ったことのあるはずのその人を思いだせない。というか、記憶にない。

ふと、まさかこれも夢なのではないか、と不安がよみがえった。

「あのさ、明。西野 育って知ってるか？」

「ああ、二年くらい前に亡くなったおまえの彼女だろ？」

「ん、ああ。覚えてたんだ」

育先輩はもう死んでいる。それが今は夢の中ではないという証拠。

「あたりまえだろ。あん時の陽は色々大変だったから、余計に記憶に残るっての」

あの時というのは、たぶん、育先輩を失った直後のことだろう。重い病気で死んでしまった育先輩。俺は彼女が大好きで、失った悲しみも重いものだった。当然、俺はしばらくの間、それを引きずり、魂の抜けたような生活を送っていた。まわりの人にも、だいぶ迷惑をかけた。明はそのことを言っているのだろう。

「あの状態のおまえを救ったのが会長だからな。まあおまえの会長への態度も理解できるってもんだ。俺も会長には感謝してるし」

また会長か。

「そういえばあいつはどうした？」

「ああ、あいつは風邪で休みだそうだ。会長も最近休みがちだし、あそこの一家で流行ってんじゃないか？」

「そうか」と相槌をしたが、明の言っていることがよくわからなかった。それに、あいつのこともよく思い出せない。確か、最近仲良くなった友達だったはずだが.....誰だっけ。

「今日お見舞いにでも行くか？」と明が提案。

「.....それもいいかもな」

「どうした？ 妙な間があったけど」

「いや、風邪うつされたくないなあ、って思ってさ」

「薄情な奴」

放課後、会長とあいつの家に行くことが決定した。俺はまだその二人のことを思い出せない。そして、今会うのは正解ではない気がした。そもそも、会って思い出すようなことがない気がする。

目が覚めると、ベッドの横には育先輩がいた。俺の顔を黙って見ていて、少し顔が赤い。

俺はすぐにこれが夢なんだと思った。育先輩がいる、それは夢の証拠。

「おはよう」育先輩は言う。いつかと同じように俺は答える。

「……………なんでここに？」

「遊ぶ約束、した」

「そうでしたね。今日はどうします？」

記憶ではこの後育先輩はこう言うのだ。「子作りする」と。俺はまたかと思いながら「生憎避妊具を持ち合わせておりません」と返答するのだ。

「子作りする」

予想通りに育先輩は言った。

「また俺をからかって。育先輩、今日は外出用におしゃれしてるじゃないですか」

「いつもと反応違う」

「さすがに対応になれましたよ」

「……………むう」

頬を膨らませて俺を睨む。可愛くてついつい頬が緩む。

「今日は暑そうなので水族館に行きましょう」

「ん。賛成」

ベッドから起き上がり、身支度をする。俺が着替えている最中に育先輩は枕を欲しがり、俺は水族館からの帰りにそれをあげる約束を交わした。

何かを忘れながら身支度を整えて、育先輩と一緒に外へ出る。日差しが厳しく、初夏にしては暑すぎる。太陽の光が目を刺激して、あたりが白く見えた。

「あっつー。育先輩大丈夫ですか？」

「平気。日焼け止め塗ってある」

「体の具合は？」

「問題なし」

そして、俺達は歩き出した。暑さの所為か、歩くスピードはいつもより遅い気がした。それに加え、育先輩は俺の腕にしがみついている、歩きにくい。

「育先輩は暑くないんですか？」

「……………暑い」

「だったら離ればいいのに」

「もとい熱い、体が」

「……………それはどんな意味の『あつい』なのかな？」

「性的な意味」

「水族館はやめてホテルにしますか？」とからかってみる。

「……………ら、ラブがつく？」

「はい。あ、どこかで避妊具買わなくちゃ」

「え、ほ、本気？」

真面目な顔で言うと、育先輩が焦りだした。まさか、俺がこんなことを言うとは思っていなかったようだ。

「育先輩が言ったんですよ？」

面白くなってきたので、俺は続けてこう言った。

「避妊具は必要ないかもしれませんね。なんたって子作りなんですから」

すると、育先輩は顔を真っ赤にして俺の腕から離れた。

「育先輩？」

「きょ、今日は……………だめ」

「そうですか」と残念がって見るが、笑ってしまいそうだ。少し俺から離れてしおらしくなっている育先輩は、予想以上に可愛かった。

俺の数歩後ろを育先輩が着いて来ながら駅に向かった。駅に行くには踏切を渡って行かなければいけないのだが、運悪く踏切で立ち往生することになってしまった。

この暑さで、同じ位置にいるのはつらい。

「俺飲み物買ってきます。ここ待ち時間長いですし」

俺は育先輩が「ん」と言って了解してくれることを予想した。

「貨物列車だからすぐに来る」

「へ……………？」

俺の予想に反して、育先輩は言う。

俺がおかしいな、と思いながら首を捻っていると、踏切の向こう側で女の子が中に入ろうとしているのが見えた。

「危ない」

育先輩もそれを見つけて、踏切を越えようとする。

その時、頭を殴られた感覚がした。それと同時に血に染まる育先輩の亡きがらが目に浮かぶ。

「育先輩！」

俺は叫んで育先輩を引っ張り戻した。

そして、俺は踏切を急いで潜り抜けて、女の子のもとに走った。

「陽！」

珍しく声を張り上げる育先輩。右を向くと列車が勢いよく突っ込んで来るところだった。

「くそっ」

一か八か、俺は女の子に向かって飛んだ。金属がこすれる音がする。育先輩がまだ叫んでいるのが聞こえる。

育先輩が言うとおりに、通過したの貨物列車だった。

*

右足が痛かった。痛いというよりも、ものすごい熱い。まるで焼かれたかのような感覚だった。

。

あたりを見渡すと、箱の中だった。ひどくせまい。それにサイレンのような音がする。

「陽！ 陽！」

育先輩が泣きながら俺を見ている。

「育先輩。どうしたんですか？」

泣いているのが不思議で、俺は困惑した。

右足の痛みで、思いだす。女の子は助かった。けどぎりぎりのところで俺は足を持って行かれたことを。

自分の右足を見ると、応急処置をした跡が見える。しかし、左足との長さがだいぶ異なっている。

冷静に考えて、ここは救急車の中だ。育先輩が泣いているのは俺が心配だからか。

「育先輩、大丈夫です。生きてますよ」

強がりではなかった。むしろ、痛みよりも育先輩が活着ていることに安心している。前の夢では育先輩が女の子の代わりに死んだのだ。それを足一本で回避できたのだから安いものだ。

育先輩が泣いているのは、心苦しいがしょうがない。

「育先輩が無事で良かった」

手を握ってくる育先輩。少し冷たいその手で、少し思い出したことがあった。

今回の夢は誰も死んでいないことを。

今までは、俺が死ぬか育先輩が死ぬかのどちらかだった。今回はもう何も起きる気がしない。アイツの意志が変化したのだろうか？

泣きじゃくる育先輩を見てから目を閉じた。

今はどうでもいい。二人が無事であるなら、これは良い夢なのだ。それ以外の事実は必要ない。

。

「ちょっと眠ります」

育先輩の反応がどんなものかわからないが、俺はそのまま暗闇に引きづり込まれた。

西野育が嫌いだった。つまらない生活を送る桜井陽に変化をもたらした。

それが腹立たしかった。

桜井陽を救ったのだ。私はそれを望んでいないのに。

西野育が死んで嬉しかった。

桜井陽はまたつまらない男になり下がった。西野育に感謝した。

桜井陽を傷つけてくれてありがとう。

けれど、やはり西野育は嫌いだ。

また邪魔をする。

私の願いの邪魔をする。

いい加減にして欲しい。

そんな男は救う価値もないのに、死んでも尚救おうとする。

頭がおかしいのではないか？

早く消えてしまえ。

私と桜井陽の邪魔をするな。

ここは二人だけの世界だ。

邪魔は許されない。

西野育が嫌いだった。つまらない生活を送る桜井陽に変化をもたらした。

それが腹立たしかった。

桜井陽を救ったのだ。私はそれを望んでいないのに。

西野育が死んで嬉しかった。

桜井陽はまたつまらない男になり下がった。西野育に感謝した。

桜井陽を傷つけてくれてありがとう。

けれど、やはり西野育は嫌いだ。

また邪魔をする。

私の願いの邪魔をする。

いい加減にして欲しい。

そんな男は救う価値もないのに、死んでも尚救おうとする。

頭がおかしいのではないか？

早く消えてしまえ。

私と桜井陽の邪魔をするな。

ここは二人だけの世界だ。

邪魔は許されない。

綺麗な女の子だと思った。

病院の中庭のベンチに座る彼女をしばらく見ていると、彼女もこちらに気づいた。そして、こちらに視線を向けると、俺を黙って見つめだした。その目に吸い込まれるように、彼女に近づく。

「あ、あの」と俺は声を震わせながら言った。「体大丈夫ですか？」

「……………平気」

俺から視線を外さない彼女は、無表情で答える。あまりに感情のこもっていない声の所為か、鳥肌が立った。

彼女の話は姉から聞いていた。彼女の担当医である姉は、よく俺に彼女の相手をして欲しいと言っていた。小さいころから病気で入院していて、友達がいなそうだ。毎日病室でつまらなそうにしていると。体の心配をしたのは、あまり容体が良くないと聞いていたから。

姉に言われたから話しかけたのではなかった。初めて彼女を目の前にして、俺は彼女を好きになった。だから話しかけた。

「俺、桜井陽です。あの西野さんの担当医の……………」

「知ってる」

「あの、俺の姉なんです」

「違う」

「な、何が？」

「あなたのこと……………知ってる」

「姉から聞いてましたか？」

「……………少し」

人と話すのが苦手なのか、口数は少ない。それに、まるで能面のように表情を変える気配がない。それでも、俺は彼女の雰囲気嫌いではなかった。むしろ、惹かれた。美しいとさえ思った。

病院のほうから姉が駆け寄ってくるのが見えた。

「おーい、弁当持ってきたか？」

走りながら声をかけてくる姉は、見た目に反して子供っぽかった。

「はいこれ。せっかく作ったのに忘れるな」

「悪い。それより学校はどうした？」

「呼びだしておいて……………まあ、学校はさぼった」

「桜井君……………不良、ヤンキー？」

「そ、そういうわけじゃなんですけど……………はは」

「こいつ、不登校だから。滅多に学校行かないんだよ」

「どうして……………？」

「色々あるんですよ」

苦笑いを浮かべる俺に対して、姉は少し笑っていた。

ベンチに座る彼女は、不思議そうにその光景を見ていた。それが、初めて彼女が俺に見せた感

情だった。

これが、西野育、育先輩と初めて会った時の記憶だ。

一か月がたった。その間に、西野さんが同じ中学校の一つ年上の先輩であることや、本当は双子だったが妹は生まれてすぐに死んでしまったこと等、ある程度彼女のことを知った。

呼び方も、当初は西野さんだったが、今は育先輩に変わった。育先輩も俺のことを名前で呼ぶ。

あの日、初めて会った日から俺は学校にも行かず育先輩のもとへ来ていた。理由は彼女が好きだから。それだけだった。

その気持ちに育先輩は気づいているのだろうけど、知らないふりをしていた。

俺はそれでもいいと思い、今日も育先輩に会いに来た。

「最近調子がいいみたいですね」

育先輩のいるベッドの横にあるパイプ椅子に腰かけた。

「……………別に」

無表情でそう答える。視線は外に向けている。窓の外は先ほどから降り出した雨の所為か真っ暗で遠くが見えなくなっていた。

特に会話をすることもなく、そのまま数時間が過ぎる。俺は小説のページを淡々と捲り、育先輩は飽きもせず外を眺めていた。

いつもこんな感じだった。

育先輩は無口で、会話が續かないし、こちらの話に興味を示さない。たまに話しても、大体がすぐに話終わる。暇な時間がただ過ぎていく。

それでも俺は彼女のことが好きだった。どうして彼女が好きなのか解らない。ただ好きなのだ。この気持ちは嘘じゃない。

「学校」

育先輩が珍しく俺に話しかけてきた。いや、独り言かもしれない。俺は返事をせず黙って次の言葉を待った。

「……………行かないの？」

嫌な話題だった。友人の明からも毎日のように学校へ来いと言われていているのに、うんざりだ。

「俺がここにいるのは迷惑ですか？」と嫌味。

「……………一緒に学校行きたい」

「は？ なんのことですか？」

「私、一時退院するから……………学校行く」

「退院？ほんとですか！？姉さん何も言わなかったのに」

「陽はそれでも行かない？」

「育先輩がいるなら毎日行きますよ」

「……………そう」

育先輩は少し嬉しそうだった。

「いつから学校行くんですか？」

「来週から」

育先輩が退院できるまでに回復していたのには驚いた。姉さんからは、病状についてあまり良

くないと一度聞いて以来、何も聞き出せなかったし、何の病気かは育先輩も教えてくれなかった。

「そうか、育先輩元気になったのか。」

「楽しみですね。あ、俺毎朝むかえに行っていていいですか？ 一緒に学校行きましょうよ」

「……………質問……………いい？」

「なんですか？」

「陽は……………私のこと好き？」

「……………？」吉報を聞いたせいか、久しぶりに気分が舞いあがっていた。こんなに気分がいいのは何年ぶりだろうか。その所為なのか、今の質問の意味が理解できなかった。

「……………嫌い？」

「えっと……………」頭が混乱した。発言の意図が全くつかめない俺は、この後自分が何を言ったのか覚えてなかった。だが、育先輩は笑顔で俺にこう言った。

「私は陽が好き」

俺はその言葉に確か「どうして？」と質問したはずだ。だけど、その答えは思いだせない。育先輩はどうして俺なんかを好きになったのか、その理由はこの先も思いだすことはないだろう。

この時の俺は、嬉しさと何かもやもやとした感情に押しつぶされそうで、平静を保つので精一杯だったのだから。

ただ、頭の中では育先輩がいる学校を思い描いていた。

学校が楽しみだ。今日から育先輩が学校に復学することになっている。残念なことに今日は一緒に登校できないらしい。

「おーい。浮かれるのはわかるが、さっさと朝飯作れ」

「姉さん、たまには自分で作れよ」

「私は仕事で忙しい。たまにしか食えない朝飯くらい陽が作ってくれ」と我まを言う姉を横眼で見ながら、朝飯の支度を始める。

「それに、私の料理はまずい」

「あー………そうだな」

「なんだその哀れみの視線は？ だいたい、焼くものはいつ焼けたかわからないし、煮るものはいつ煮えるのかわからない、包丁はメスより使いづらいし、肉を切るのは仕事だけで充分だ」

「屁理屈」

「解剖するぞ？」

姉との会話は好きだった。育先輩との会話は、言葉のキャッチボールが成り立たず、言うなればバッティングセンターの機械が勝手にボールを投げて、虚しく転がるボールをだたひたすら眺めているようなものだった。それに比べると、姉との会話は楽しい。

それなのに、どうして俺は育先輩が好きなのだろう。最近よく思う。どうして？ と。

「弁当もよろしく。また、たこさんウィンナーとか入れたら殺す」

「はいはい」

「あれの所為で、うるさい看護婦どもに騒がれたんだぞ。ちっ思いだしたら腹が立った」

「はいはい」

よし。今日はリンゴをウサギにしてやろう。

「そうだ。一つ言っとくが………」

「なんだよ？」

リンゴをウサギにしている所に、姉が台所まで来てそれを口に運んだ。ウサギ死亡。

「………ああ、なんだっけ？」

「一つ言っとくが、だよ」

「ん、そうだ。あれだ、西野育」

「………？」

「あんまり無理させるなよ」

「わかってる。わかってるから、包丁こっち向けんな」

ウサギに怒っている姉は、包丁をまな板に刺し、浮かぬ顔をしてリビングに戻っていった。

「不純異性交遊は禁止だからな」

「俺まだ中学生だぞ。興味は十二分にあるが、俺はへたれだ」

「そうか。不能か」

リビングから微かにそう聞こえた。腹が立つ。

「元気出せよ！」

「それはどこを？ でしょうか？」

「そっか、陽はEDか……」

「おい、なんかいらん心配するな。薬とか持ってきたら飯抜きだからな」

姉沈黙。持って来る気満々のご様子。

こうなったら、腹いせに弁当をカラフルにいろどってやる。後のことなんか知ったことではない。

*

他人が身近の人物に興味のないふりをする。関心を持っていないふりをする。実際に興味がないと思っても、どこかで気にしてしまう。それは必要以上に関心を向けてしまうことになる。

「おお、陽久しぶり。学校で会うのは、だけどな」

友人の田邊明は、嬉しそうに笑った。

何ヶ月ぶりかの学校は、以前とまったく変わっていなかった。

「わかってたけど、ここは居心地悪いな」

「そう言うなって。知らないふりしてりゃいいだろ？」

それがとても疲れるから言っているのに。

「で、誘っておいてなんだけど、なんで学校に来る気になった？」

「.....好きな人ができたから」

恥ずかしがりながら言うと、明に爆笑された。失礼な奴。

「はは、そっか。よかったな」と俺の頭をぐしゃぐしゃとかき回した。「陽も成長したんだな」

明の手を払いのける。

「随分と上から目線だな。おまえは俺の保護者か」

「保護者兼友人のつもりだけど？ なんだ今更」

何言ってんだこいつ？ と言わんばかりの、というか言ってるけど、そんな顔をする明にため息でこたえる。

「明と話すと疲れる」

「俺はおまえと話すの好きだぞ」

屈託のない笑みを浮かべる明を見ると、なんだか学校の居心地の悪さも忘れられた。

「で、俺の席は今どこ？」

久しぶりの学校で困るのは、自分の席がわからないことだ。

「窓側最後尾」

後ろから声がした。

「久しぶりだね。桜井君」

「ん、ああそうだな」

振り返って確認すると、クラスメイトの女子が俺の顔を見上げていた。

「好きな人できたの？」

「ごめん」

「なんで謝るの？」

「なんでかな.....神埼さん、とにかくごめん」

「.....これ、授業のノート。桜井君には必要ないかもしれないけど」

神埼さんは数冊のノートを俺に差し出す。俺は躊躇いながらそれを受け取った。

「ごめん」

「もういいよ。これからはちゃんと学校来てね」

そう言い残して、神崎さんは自分の席に向かった。

「陽は神崎のこと苦手か？」

今まで黙っていた明が、神崎さんの方を見ながら小声で俺に言う。

「可愛いし、人当たりもいい、学級委員長、みんなの人気者。何が不服だ？」

「不服って………ほら俺学校あんま来ないから怒られるのかなって」

「神崎に？ あいつが怒るところは想像できないな」

「………そろそろ、ホームルームの時間だろ？ 俺自分の席に行くよ」

「ん、おおそうだな」

明の席が少し離れていて良かった。あれ以上追及されたら嘘をつき通せなかった。

学校に来たくない理由は二つ。

一つは、学校の人たち、生徒や教師が俺に向ける視線だった。無関心の視線。

どういう訳か、学校の間は俺が気になるらしい。俺のことを興味のないふりをして、気にしている。怯えているようにも見える。

俺が何をしたのかわからない。普通に学校に通っていたのに、ある日突然おかしくなった。

俺はその雰囲気嫌で学校が嫌いになった。

それが一つ。もう一つは、神崎さんが原因だった。

学校の居心地の悪さに嫌気がさして、度々学校をさぼるようになったころの話だ。

俺は神崎さんに告白された。

「好きです。ずっと好きでした」

嫌いな学校、嫌いな学校の間の中で神崎さんだけが違った。

それは俺にとって明以外の救いで、正直嬉しかった。神崎さんが嘘を言っているようには見えなかったし、小刻みに震えて緊張している姿が可愛かった。

だけど、俺は断った。

理由は、神崎さんも俺と同じ目に会うのを避けるため。神崎さんのことは嫌いではない、あの瞬間は好きだったかもしれない。だからこそ、俺は彼女を突き放した。

そんな彼女に引け目を感じて、俺は学校に行かなくなった。

放課後。育先輩と事前に一緒に帰ることを約束していたので、玄関に向かう。玄関に行くと、そこには数名の男子に囲まれている育先輩がいた。

「……………迷惑だから」戸惑い気味の声で、育先輩は男子達を突き放している。

「いいじゃん。一緒に帰ろうよ」

どうやら育先輩のことを気に入った人達のようなのだ。確かに育先輩は美人だし。

「育先輩お待たせしました」

大きな声でそう言った。当然、皆の視線が俺に向けられる。

「陽」と一言言うと、男子から逃げるように俺の方に来る。

「なんだおまえ？ 彼氏気取りか？」

一人のガラの悪い男が言う。今時流行らないような昔風のヤンキーを彷彿させるような格好をしていた。正直、ワックスで固めすぎてトサカのようにになっているのが笑える。

「正真正銘彼氏ですけど」笑いを堪えてなるべく強気で言ってやった。

「おまえが？ ひよろひよろのくせに」

そこは関係ない気がするけど。

柄の悪い男から育先輩を守るように前に出ていると、金髪のガラの悪い男が、昔風の男に耳打ちをしはじめた。

「おまえ、桜井陽か？」

「そうですけど？」

「ちっ、わかったいいよもう。殺されちゃあ話になんないからな」

それだけ言うと、男子達はそそくさと帰って行った。

しばらくその場でポーっとする。柄の悪い男子がなぜ俺ごときにビビって逃げたのか不思議だった。

「陽、ありがと」

「あ、えっと俺何もしてませんけど……………どうしたんでしょうね？」

一つ思い当るが、まさか上級生まで俺の噂が広まっているとは思わなかった。

「やっぱり陽はヤンキー？」

「違います！ こんな貧弱そうなヤンキー誰も怖がらないでしょ」

「でもさっきの人たち殺されるみたいなこと言ってた」

「それは俺も不思議で」

俺についての噂が流れていることは知っていたが、その内容までは知らなかった。ただ良くない噂だということだけは何となく皆の態度からわかる。

「それより帰ろ」

「そうですね。手でも握りますか？」

冗談っぽく言ったつもりだが、育先輩は手を差し伸べてくる。

「……いいよ。陽と手……繋ぎたい」

恥ずかしそうにうつむいて、耳まで真っ赤にして俺の手をとる。最近気付いたことだが、育先輩はとてとても恥ずかしがり屋さんだった。退院宣言の日から数日の間にそれは判明した。

髪に着いている糸くずを取ろうとすると、体ビクつかせて頬を染めたりするほどに。育先輩の話によれば、いつも窓の外を眺めていたのは恥ずかしくて俺を見れないからだとか。可愛すぎて俺は言うことがない。

それでも、育先輩は人と話すのが苦手な相変わらず無口だった。こうして手を繋いで一緒に帰っても無言が支配している。

「育先輩、学校どうですか？」

俺から会話を投げかけないと家に着くまで沈黙が続くだろう。それは寂しいのであたりさわりのないことを訊く。

「意外に楽しい」

育先輩は小さいころから病院生活だと聞いた。学校は憧れなんだろうと勝手に思う。

「けど、陽と会えない」

その発言に俺は顔を赤くする。不意を突かれて言葉が続かない。

「照れてる？」

「照れてません」

「うそ。顔赤い」

「これは熱いだけです」

「発情？」

「してませんよ！？ 照れてるだけです」

「やっぱり」

小さく笑う育先輩。あ、笑った顔見るのはじめてかも。

「でも陽とあまり会えないのは残念」

「病院に居る時より会えてませんね」

「うー、それは嫌だ」

可愛く唸る育先輩、本当に可愛い。そして、どうしてそんなに俺を熱心に愛してくれているのか不思議でたまらない。

「昼休みとかなら会えますよ。幸い、うちの学校はまだ給食じゃないですから」

近頃になって、弁当から給食になっている学校が増えだした。来年にはきつとうちも給食になるだろうと姉さんが言っていた気がする。

「会う。一緒にお弁当食べる」

「ちなみに育先輩、料理できます？」

「……無理」

料理をする機会がなかったのだろう。病院にいては料理なんてできないからな。

「じゃあ、俺が育先輩の分まで作っていいですか？ こう見えて料理はかなり得意です」

「いいの？ 迷惑じゃない？」

「姉の分も作っているので二人も三人も変わりません」

「………お願いします」

それから珍しく会話が続いた。退院して陽気になったのか、育先輩は表情をコロコロ変えて

楽しそうに俺との帰り道を堪能していた。俺も楽しくて、育先輩が病気であることを忘れてしまっていた。

育先輩が学校に通い始めて一週間近くが経過した。

「桜井君。育さんと付き合ってるの？」

教室で怠惰に過ごしていると、神崎さんが話しかけてきた。俺は身を強張らせ、罪悪感で苦しくなる胸をどうにか正常に戻そうとして「ごめん」と今の感情を神崎さんにぶつけた。

「そうなんだ。育さんいい人だもんね」

「育先輩のこと知ってるのか？」

「家が近くで、育さんが病気になる前に何度か遊んだことがあるの」

神崎さんの話では、育先輩が入院してからもお見舞いに行っていたらしい。

「でもここ一カ月くらい俺育先輩に会ってたけど、神崎さん来なかったよね？」

「行ってたよ？ ただ桜井君がいたから、時間ずらしただけ」

初めて聞いた。姉さん、友達がいらないなんて嘘じゃないか。駄目姉め。

「桜井君のこと教えたのもあたしだしね」

「え？」

初めて会った時のことだ。育先輩は俺のことを知っていると言っていた。つまりそれは、神崎さんが俺のことを話したからということになる。

「なんで俺なんかのことを？」

「好きな人の話を友達にするのは普通でしょ？」

「どういうことは、育先輩は神崎さんの気持ちを知ってて……」

「違うの。育さんと桜井君を争ってたの。あたしが話す前から、桜井君のこと気になってたみたいだから」

「どういうこと？」

「それは本人から聞きなよ。まああたしは負けちゃったみたいだけど」

わざとらしく「あーあ」と神崎さんはうな垂れる。

「嫌味？」

「ちょっとね。で、桜井君に今日はお願いがあって話しかけたの」

「何？ できることなら何でもする。俺は神崎さんを傷つけたわけだし」

「じゃあ、あたしとお友達になって。田邊くんみたいに、桜井君と仲良くなりたい」

それは、友達のいない俺にとっては魅力的な提案だった。けれど、それを受け入れたら、あの時告白を断った意味がない。俺と友達になるということは、同じように変に注目の的になるということ。現に、明もその所為で友達が俺以外にいない。神崎さんは友達も多いし、人気もある。失うものが多すぎる。

「それは考え直した方がいいよ？ 俺と仲良くなったら……ほら」

周りの生徒が俺と神崎さんを見てひそひそと話している。

「あたしはそんなのどうでもいい。どうして育さんはいいのにあたしは駄目なの？」

そこまで言われると、俺は反論しようがない。

「どうしてそこまで俺に……」

「あたし諦めが悪い方なの。育さんにも言ったけど、隙ができれば桜井君を奪うつもりだから」

「え！？　じゃあもしかして、育先輩は俺が神崎さんに告白されたこととか」

「知ってるはずだよ。というかあたしが教えた」

神崎さんは普段からは想像できない顔で笑った。それはいたずらっ子が悪だくみを考えているようにも見えた。

「神崎さんキャラ違うね」

「あたし、本当はもっとさばさばしてるの。委員長キャラは仮の姿だから」

そう言って神崎さんは、後ろ髪を縛っていたゴムを外した。後ろ髪を縛っていたせいか、神崎さんは地味に見られがちだが、それを解いた今は、本当にさばさばした女の子に見えた。

「どう？　印象変わったでしょ？」

「……………うん」

「じゃあ、これからよろしくね。友達なんだから陽君でいいよね」

「ちょっと待て。俺はまだ了承してないぞ！」

「あれ、何でもするって言ったのは誰だっけ？　陽君嘘つくような人だっけ？」

本当に今までの彼女が偽物だったかのように、神崎さんはいやらしく笑った。しかし、これはまた目を惹かれる笑い方だった。

「わ、わかった。でも知らないからな。どうなっても」

「大丈夫。陽君なら守ってくれるでしょ」

「ホント知らないから」

「よかった。じゃあ陽君、あたしのことも下の名前で呼んで」

神崎さんの下の名前は確か……………

「燐……………さん」

「ちょっと堅苦しいけどいいか。これからよろしくね」

燐さんはニツとはにかんで、頬を赤くしていた。

そしてその日の昼休み。俺と育先輩、明に燐さんの四人で昼食をとることになった。

「し、しかしこれはおいしい展開だな。な、陽！」

明が興奮気味に俺に囁く。

「別におまえは呼んでない。本当は育先輩と二人きりの時間なのに」

そう言って育先輩を見ると、燐さんと話していた。たぶん、さっきのことを燐さんが教えているのだろう。聞くところによると、俺についての進展があった場合には互いに報告しているのだとか。

「陽」

いきなり育先輩が声を上げる。その声はどこか怒りを含んでいるように思えた。

「浮気はだめ」

「わかってます。燐さんとはただの友達です」

「寂しこと言わないでよ。これから親友になるんだから」

「燐も陽を盗らないで」

「それはだめ。あたしあきらめ悪いから。先に好きになったのだからってあたしなのに」

「あう、それは」

「育さんに陽君盗られたのに、盗った人が言うかな普通」

「うーいじわる」

こうしていると、育先輩が後輩で燐さんが先輩のようだ。というか、かなり仲がいいことに驚いた。俺と明の関係のように、親友といってもいいくらいに見える。

「陽！ おまえ神崎に告白されてたのか！？」

「あ、おまえに言い忘れてた。悪い」

「なんでおまえなんかがモテる？ 俺の方が面倒見も良くて、人当たりもいいのに……お二人さんなんでこいつなんかが好きなの？」

明は女子二人に話を振る。育先輩は恥ずかしそうに顔を赤くし、燐さんも照れくさそうに頬を掻いた。

「優しいところ？」

二人同時に答える。疑問形なのが気になるが。

「こいつが？ ただの引きこもりの軟弱男だぞ？」

明、それは言い過ぎだ。ちょっと傷ついた。

「神崎も知ってるだろ？」

「うん。陽君は体育の成績クラスで一番だってこと」

「た、確かにこいつは運動神経いいけど」

「あと、勉強もできるし、容姿もそこそこ。好きにならない方が不思議」

燐さんって結構ミーハーなのかな。というか、俺のこと調べすぎ。もしかしてストーカー体質とか？ ありうる。

「燐、いいこと言う」

「まあね。これでも陽君一筋だから」

恥ずかしい。褒め殺しもいいとこだ。俺明日あたり死んだりしないだろうな。

「おまえ、明日あたり死ぬんじゃないか？」明が冷めた目で俺を見る。

「俺もそう思った。遺書でも準備しておくか」

「あ、陽君が死ぬならわたしも死ぬ。後追い自殺してやるんだから」

「私も同じ」

何が二人をここまでさせるんだ？ 俺にはそんな価値なんかないのに。

「おまえ、死ねない理由ができたな。なんかあまり羨ましく思えなくなった」

「変わるか？」

「いや、色んなもので押しつぶされそうだから遠慮するよ」

俺も身の危険を感じてきた。恋愛のもつれで殺されるとか最近多いみたいだから………気をつけよう。

*

「え、海に行きたい？」

隣さんと交友を深めた日から一週間が経過したある休日。育先輩が急に海に行きたいと言い出した。

「行ったことない。潮風は体に悪いからって」

「まあ、病気も良くなったみたいだし行ってもいいですけど.....まだ泳ぐには早いですよ？」

「行きたいだけ。近くで見たい」

「病院の窓からも見えますけど」

「近くで見たい」

育先輩がどこかに行きたいと言い出したのはこれが初めてだった。学校がない休日は大抵どちらかの家に行くか、ちょっとした買い物に出かけるくらいで、それらも俺の提案だった。姉から無理はするなと言われているので、無理させることは控えていたという訳だ。

「わかりました。それならお勧めな場所知っているので案内します」

「.....ありがと」

育先輩は嬉しそうにほほ笑んだ。表情の少ない育先輩がそんな風にほほ笑むのが嬉しくてこの時点で俺はかなり舞いあがっていた。

俺の家を昼前に出発し、一時間近くバスに乗り到着した場所は、岩がたくさんあり砂場が見当たらない綺麗な場所だ。

「ここ？」

育先輩が不満そうに言った。おそらく砂浜のほうに行きたかったんだろう。

「少し歩きます。きっと育先輩も気に入ると思いますよ」

「.....わかった」

育先輩の手をとり、なだらかな岩を下りていく。段々と海が近づき、綺麗なエメラルドブルーが見えてくる。

「ここです。たぶんあまり知られてない場所なので」

「.....海」

育先輩は一言そう言うと黙り込んだ。

岩場に囲まれた小さな砂浜。ただ波の音だけが耳を刺激し幻想的な空気を作り出す。

ここは以前偶然家族で来たときに見つけた場所だった。両親と姉と俺、あとはもう一人誰かいた気がするのだが今は思いだせない。五人でここを見つけたときは謎の高揚感で皆代えの服もないのに海ではしゃいだ。

「どうですか？ 俺たまに一人で来るんです。落ち着くっていうか、気分が晴れていく感じがして」

明もこの場所を知っている。夏になると二人でよく泳ぎに来たり、釣りをしたりする。

「うん。こういう所に来たかった」

育先輩は満足そうに砂を踏みしめて笑った。

「私、死ぬならこんなところで死にたい」

突然そんなことを育先輩は笑顔のまま言う。

「冗談やめてくださいよ。俺育先輩が死ぬのなんて嫌です」

「でも、私は長生きできないから」

「……………わかってます。けど、今すぐに死ぬわけじゃないんですし、そんなこと言わないでください」

「……………うん。でも病院で死ぬのは嫌だから」

育先輩はそう言うと、靴と靴下を脱ぎ棄てて海に足を入れた。

「冷たい」

「そりゃまだ水温低いですし。今日はそれほど暑くないから」

「でも気持ちいい」

足で水をはじきながら育先輩は子供のように水遊びを始めた。俺もその光景が微笑ましくて、我慢できずに裸足になり水に足をつける。

水温はまだまだ冷たいが、足を入れるくらいにはちょうどいい気がした。

「陽はどうして私が好きなの？」

「また突然そんなことを。別に理由なんてないですよ」

「隣のことは好きにならないの？」

「愚問ですよ。今は育先輩がいるんですから」

「……………そう」

次の瞬間俺は育先輩に水を掛けられていた。少量が口に入り、しょっぱさで顔を歪める。

「私、陽に会えてよかった」

「俺もです」

袖で顔を拭いながら、俺は泣きそうな顔をしている育先輩を見た。

「大好き」

瞳から涙をこぼしながら言う育先輩は、今までで一番魅力的な表情をしていた。

俺はそんな彼女が愛おしくて、何も考えずに抱きしめた。

「えっち」

「育先輩に言われたくないです。普段は子作りしようとか言うくせに」

「でもしてない」

「俺が断ってるからでしょ」

「でも陽とならいい」

「俺達にはまだ早いですって。キスもまだなのに」

「じゃあ、今する」

「もちろんキスを、ですよ」

「子作り」

「……………育先輩照れてませんか？」

抱きしめている所為か、育先輩が熱くなっていることがわかる。きっと恥ずかしさをごまかす

ためにそんなことを言っているのだろう。

だから俺は有無を言わず、キスをした。

間近にある頬からは当然のように熱さを感じた。照れている証拠だ。

俺はそれがおもしろくて、触れる唇をしばらく離さなかった。

翌日の朝方。

俺は姉に叩き起こされて目覚めることになった。

無表情の姉は、怒っているようにも見えるし、泣きそうなのを堪えているようでもあり、俺は「どうした？」と寝起きの所為でかすれた声で言った。

そして姉は、言いづらそうに俺に告げたのだ。

西野育が死んだ、と。

育先輩の葬儀も全て終わり数日がたった。

俺はまた学校へ行かなくなった。部屋にこもり、最低限の家事と勉強をする日々を過ごす。

明からは毎日のように「学校に來い」と電話が来る。それに俺は「そのうちな」と返すだけで、進展は見られない。

そういえば燐さんだが、育先輩の葬儀には顔を出さなかった。電話で明にどうしているか訊いたら、学校には来ていないと言う。燐さんに何かあったのかもしれないが、俺はそれどころではない。今は育先輩の死が大きすぎて、どうすることもできない。

あの日、育先輩が死んだ日。

俺は不思議なことに涙一つ流さなかった。葬式、お通夜、火葬、全てに育先輩の両親のすすめで参加したが、どの場でも涙を流すことはなかった。

俺はどうかしているらしい。今更ながらそれに気付く。こんなんでは学校で奇異な目で見られるわけだ、と納得してしまう。

俺はここ数日、もしかしたら育先輩のことがそれほど好きではなかったのではないか、ということばかり考えていた。

育先輩が死んで一か月が経ったある日。

俺はというと未練がましく海辺に来ていた。例の砂浜。育先輩と最後に過ごした場所。

「ぬるい」

足を海に突っ込むと、前のような冷たさはなかった。真夏の今は水温も泳げるまでに上がっていた。

今は夏休み。学校に行かないでいいだけで少し気分が楽になった。こうして平日の真昼にこうして出歩けるすばらしさは格別だと思う。

これで育先輩がいたら。

「…………くそ！ どうして泣けないんだ俺は！」

足に力が入り、砂に指が埋まる。生ぬるい感覚が指を包んだ。

「荒れてるね」

誰もいない秘密の砂浜で声がした。聞き間違いかと思って、周りを見渡すと珍しい人物がそこにはいた。

「陽君久しぶりだね」

「燐さん」

燐さんは苦笑いを浮かべながら、俺の方に近づいてくる。

「どうしてここにいるんですか？」

「陽君こそ、ここはあたし達の秘密の場所なのに」

「あたし達？」

「そ、あたし達」

誰との秘密の場所なのか、俺は気になったが訊かなかった。

「どう元気？」

「そこそこ」

「そっか。けど、全然元気に見えないよ？」

「ここ一カ月くらいずっとこうだから」

「育さん死んじゃったね」

燐さんはまるでそれがどうでもいいことのように言った。けれど、俺は怒りもしなかったし、むしろその言葉は俺が言っているようにも感じられた。

「どうして育先輩の葬儀にこなかったんだ？」

俺はそれだけが気になっていた。育先輩と燐さんは姉妹のように仲が良かったのに。

「葬儀にはトラウマがあるからね。行きたくても行けなかった」

「そうか。悪い、変なこと言って」

「どう？ 少しは吹っ切れた？」

「全然」

「だよ。いきなりだもんね」

燐さんは靴を丁寧に脱いでから、海に足を入れた。俺はその姿が育先輩と重なり胸が苦しくなった。

「陽君、あたし陽君に謝らなきゃいけないんだ」

足で水を弾きながら燐さんは言う。

「あたしさ、陽君のことが今でも好き。たぶん育さんと同じかそれ以上に陽君のことが好き」

「……ごめん」

「またそれ？ たまには違う反応してよ」

「これ以外俺は思いつかない」

「まあ最後まで聞いてよ。あたしさ、育さんと約束してたの。もし育さんが死んだら陽君を諦めるって。逆に育さんは陽君があたしのことを好きになったら諦めるって。等価交換みたいな約束」

ははは、と濁った笑みを浮かべながら彼女は続ける。

「けどさ、諦めきれないじゃん？ 育さんもいなくなったし、陽君の目の前には今あたししかないんだよ？ どうして諦められるかな」

「でも、約束なんだから？」

「死人に口なし」

「燐さん性格悪いね」

「あはは、冗談だよ。で、陽君はどう思う？」

俺は、育先輩と約束すらしていない。育先輩と付き合っていた証拠が何一つない。もし、二人の約束のように本心は別なところにあったとしても俺の場合は……

「俺は約束を守るべきだと思う」

「うん。ありがと。これで陽君のこと諦められそうだよ」

「ごめん」

「いいよ。あたし、陽君の『ごめん』には慣れた」

それから、燐さんは何かに気づいたように「あっ」という声を出す。

「そうだ。育さんから預かってるものがあるから明日あたしの家まで来て」

「いいけど、渡すものって？」

「その時まで楽しみにしときなよ。生きる希望を想像しながらさ」

「今の生きる希望は育先輩だけだよ」

「うわぁ、陽君本当に育さんのこと好きなんだね。あたしの付け入る隙ないや」

そうなのか？ と声に出しそうになる。俺が育先輩を好き、それは嘘ではないのだろうか。

「なぁ、俺は育先輩のこと好きだったのかな？」

「何言ってるのさ！ そんなこと、育さんは充分感じていたと思うけど」

「何を？」

「自分は愛されてるって」

そういうことか。俺のこのもよもよした気持ちは育先輩を好きか好きでないかではなく、育先輩がどう感じていたのか気になっていたからだ。

育先輩は言っていた。「陽に会えてよかった」と。

育先輩は俺で満足してくれていたのか。

「なんか元気になったみたいだね。よかった」

「ああ。ありがと、燐さんのおかげだよ」

「今度はありがとうか、参ったな」

「どうした？」

「ねぇ、あたしのこと呼び捨てにして」

「いや、急に言われましても」

「いいから。感謝の気持ちを表現するつもりでさ」

「うう、り、燐」

恥ずかしさで額に汗が浮かぶ。

「これからもそう呼んでね？ 絶対だよ」

「わかった……」

「今日を持って、あたしは桜井陽の親友です。恋中には絶対になりません」

空に向かってそう宣言する燐。上を向いているその顔から、雫が垂れてくるのが見えた。どうやら彼女は泣いているようだ。

「じゃ、今日はもう帰るね。陽君に会えたし、今日は良い日だった」

「失恋したのに」

「うう、傷はえぐらないで」

「じゃあな燐。また明日」

「陽君！ 陽君を好きだった期間は楽しかったよ。ありがと！ じゃあね！」

そういうと燐は裸足のまま岩を登り、この場から去って行った。

*

次の日。何時に神埼家を訪れればいいのか分からず、昼をちょっと過ぎたあたりに外出することにした。隣の家には前に一度育先輩と訪れていたのだから迷うことはなかった。徒歩二十分ほどを用いて、神埼家に着く。

しかし、そこには無人の家がぽつりと主の不在を訴えていた。

もぬけの殻。以前来た時に庭に広がっていた花の数々、使っていない置きっぱなしの車、外からでも確認できる隣の部屋の色鮮やかなカーテン、それは全てが消え去っていた。

要点をまとめると、神埼隣はどこかへ行ってしまった。

この状況に納得いかない俺は、その場でしばらく自分はどうすればいいか考える。

確かに昨日、家に来てと言われた。渡すものがあるから、と育先輩から預かっているモノを俺に渡す約束を交わした。そうだ、そのモノはどこにあるのだろうか？ と探そうとしたが、それは探すまでもなく見つかった。

郵便ポストの上に『ここにある』とたぶん隣が書いたのであろうメッセージがあった。

俺は郵便ポストを開けて中を確認する。

二つの封筒がそこにはあった。

ひとつはまるでラブレターのように可愛らしい封筒で、もう一つは色っ気のないただの封筒だった。

後者はおそらく育先輩のものだろう。あの人が女らしい封筒を持っているはずがない。じゃあこの可愛い封筒は？

俺は育先輩の封筒よりも先にそちらを開いて、中身を見る。

手紙が一枚、文章はそれほど長くはない。それをその場で黙読する。

『陽君へ

まずあたし引っ越します。家の都合で遠くに行くことになりました。別に育さんが死んだからとか、陽君に振られたからではないので気にせずに。

それと今日、いや陽君が見るから昨日か。

昨日は会えてよかった。最後に思い出の場所に行こうと思って行ったら陽君がいるからびっくり。陽君は荒れてたけど（笑）

あの場で引っ越すこと言っても良かったんだけど、それじゃおもしろくないじゃん？

だから何も言わずに去ることにしました。

あ、離れて会えないからってあたしとの縁切っちゃ嫌だからね！

親友！ これ忘れないように。

次に会うことがあったら、ちゃんと親友としての振る舞いよろしく！

ではでは、また会う日まで

神埼 隣』

内容を読み終わると、隣からの別れの挨拶だということがわかった。

俺はモヤモヤとした気持ちを抱えて、思わず手紙を握りつぶしてしまった。

あいつ、親友だなんだと言いながらこんな手紙を、しかも引っ越し先も書かずに……

そんなことを考えていると、とても育先輩の手紙を読む気分にはなれなかった。

だから俺は二つの封筒を抱え、そのまま帰宅した。

こうして俺の夏はただ無意味に、自堕落のまま終わっていった。

それから先も育先輩の封筒を開けることはなかった。

だから言ったのに。

あなたには陽を救うのは無理だと。

あなたのしていることは、陽を苦しめるのではなく陽に自分の存在を認めてもらおうとしているだけ。

私がいようがいまいが、陽があなたを思い出すことはない。

あなたを思い出すことがあるとしたら、私を利用するのはやめた方がいい。

それは無意味で馬鹿げたことだから。

次は神崎燐の番？

また無意味なことを繰り返すの……

もう私は知らない。

あなたと供に過ごした二年間、意外と退屈しなかった。

だって、ずっと陽と居れたから。

私はもう満足。

陽が私のことを本気で愛してくれていたことを知れたから。

だからあなたには感謝してる。

だけど、もう私は消えるから。

後は一人で頑張ってる。

あ、でも最後に一つお願い。

大丈夫、あなたには関係ないから。

うん、さよなら。

でも最後に言わせて。

「私の勝ち……残念でした」

目が覚めると、そこは真っ白で何もない世界だった。

あたりを見渡しても、果てもなく白。本当に白なのか疑問に思うが、白という以外に思い当たらない。ああ、無色と言ってもいいのかもしれない。

そんな世界で俺は一人、一本の木のように立っている。

悲しさと愛おしさがこみ上げてきて、なんだか無性に泣きたくなった。

けれど、育先輩が死んで以来泣いていないことを思い出す。

あれ以来俺は泣くと言う行動が欠落していた。

だから泣きたいという感情はきっと気の所為だ。

さて、どうしよう。

ここは確実に夢の中だ。授業中に我慢できず寝てしまったのだ。昨日の変な夢の所為で寝不足な体は、俺の意思に反して眠りに落ちてしまった。

まったく、怖くて寝たくなかったのに。

こんな何もない世界ですることはない。育先輩もいないし、俺を死に至らしめるものもないようだし、今回は安心していいようだ。

あの変な声も聞こえないし、もしかして解放されたのか？

「残念でした」

どこからかあの嫌なセリフが聞こえる。俺は一瞬で鳥肌を全身に廻らせ、声が聞こえた後ろを振り向く。

「久しぶり………陽」

聞き覚えのある声だと思った。昨日から何度も聞いているはずなのに、その声はとても久しぶりな気がして、俺は戸惑った。

「ごめん。まだ解放されてない」

『育先輩』は泣きそうな顔をしてそう言った。

「育先輩？ あれ、なんでかな今までと何か違う」

ここは夢の中で、何度も育先輩と過ごす夢をここ一日で何度も見ていた。それなのに、それなのにどうしてか、そこにいる育先輩はまるで『本物』のようだった。

「今までの私は、あの子が作りだした私だから」

「言ってる意味がわかりません」

「私は、本物ってこと」

証拠なんてどこにもないのに、目の前にいる育先輩が言っていることは本当な気がした。

「二年振り、かな？」

「………そうですよ？ 俺育先輩が死んでから大変だったんですよ？」

「知ってる。全部見てた」

「育先輩何も言わないで死んで」

「ごめん」

「あの人のおかげで少し元気になりましたけど」

「うん」

「でも、ずっと考えてたのは育先輩のことで」

「そう」

「……………会いたかった」

「私も」

育先輩は、俺が二年前の浜辺でしたように抱きついてくる。

「陽ごめん。……………ごめん」

泣きながら育先輩は言う。声はかすれて、長い髪の毛が嗚咽と共に揺らぐ。

「私もっと陽と一緒に居たかった！ 陽と色んなことしたかった！」

柄にもなく声を荒げている育先輩に、俺は何も言えずに固まる。

「……………陽のこと大好きだった」

それを聞いた瞬間、俺は目頭に熱さを感じた。

何年ぶりなのか、悲しみの涙が頬をつたった。その忘れていた感情が一気に巡り、俺は止めることのできない涙を吐き出した。

「俺もっ……………俺も育先輩が好きで、みっともないくらい大好きでっ！」

「うん、ありがと」

「けど、何も言えずに育先輩が居なくなって！」

「……………」

「育先輩、これからはずっと二人でいましょう。この世界ならきっと大丈夫です。根拠はないけどそんな気がします。だから二人でここに」

「ごめん。それはできない……………確かにここは特別だけど」

「……………なんで？」

「……………」

育先輩は何も言わなかった。見つめあっても、俺の目から涙は溢れているが育先輩はもう泣きやんでいた。

いや、泣くのを我慢しているようにも見えた。

「陽、これが最後」

「ちょっと待ってください！」

育先輩は俺から離れる。

「陽に会えてよかった」

育先輩は、二年前と同じ表情で二年前と同じことを言った。

「大好き」

「俺も、俺も大好きです！ だからっ、だからまだ！」

俺はみっともないことを承知で叫ぶ。白い世界ではその声は響かず、すぐに消え去って行く。

「今までありがと」

「まっ……………！」

待ってと言おうとすると、育先輩が俺の唇を手でふさいだ。

「ばいばい」

そして俺が言葉を飲み込んだ瞬間、育先輩は目の前から消えた。

「育先輩！」

俺はひたすらその名前を呼んだ。

わかっていた。

これが最後。

もう二度と育先輩に会うことはできない。

わかっていたから……だからこそ離したくなかった！

それなのに……

「あなたのことが大好きだったのに。だから、だから」

白い世界が段々と灰色に変わって行く。たぶん目覚めが近いのだ。

だけど、俺は目覚めるまで泣き続けようと思う。

別れの言葉は認めない。

けれど、もう二度と会えないことはわかってしまっている。

言いたくない。けど言わなければいけない言葉を俺は迷いながら口にする。

「さようなら……育先輩」

そしてそれを認めたくない俺はこう付け足す。

「また会いましょう」

叶わない望みをこれからは生きる希望にしようと思う。

そうこれでいい。

きっとこれでいいんだ。

手紙

私のことは忘れてください。

西野育